

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	織田 雪世
論文題目	アフリカ都市部におけるジェンダーと女性の経済活動 ーガーナの首都アクラにおける美容師業の展開からー		
（論文内容の要旨） 本研究は、アフリカ都市部で近年急増している美容師業に焦点をあて、その経済活動の展開を、現代アフリカの都市女性によるジェンダー枠組みへの対応という観点から検討しようとしたものである。調査地は、女性の経済活動の活発さで知られる西アフリカ沿岸部、ガーナ共和国の首都アクラである。 序章では、本研究を先行研究の中に位置づけ、分析の視座を提示した。ジェンダーは、個人に期待される社会的役割を規定し、資源へのアクセスに影響を与える要素のひとつである。アフリカのフェミニズムは、欧米のジェンダー・モデルに基づく偏ったアフリカ女性イメージに異議を唱え、出産肯定的で生計志向の強い独自のアフリカ女性像を強調してきた。しかし、その際に強調された女性像は、女性を「夫や子どもの支援者」と価値づけるジェンダー・ステレオタイプを再強化し、結果として、本来は批判の対象であるはずの抑圧的なジェンダー体制にむしろ貢献してしまいかねないという問題をはらんでいる。この問題を回避するためには、バトラーが提起した行為遂行性の概念を念頭に、「既存のジェンダー体制を前提としつつ、日々の営みのなかでその体制を少しずつずらしていく」アフリカ女性の動きに注目することが有効だと考えられる。 ガーナ南部地方の女性も支援者的役割を負っており、経済的貢献と家事・育児という二つの役割が期待されている。同地方のジェンダー関係に関しては、男女が経済的にも居住形態としても分離的であり、婚姻紐帯よりも親族紐帯のほうが強いという特徴が指摘されてきた。ただし女性は資源へのアクセスが弱いという、政策策定側のジェンダー・バイアスや経済危機、構造調整政策等の影響で、その状況は悪化している。家事・育児面の支援も得にくくなっており、女性は、限られた資源でより重い負担を担う傾向にある。この状況下で近年急増したのが、ヘアサロン（以下サロン）で美容師として営業する都市女性の姿である。ここには、現代ガーナ女性によるジェンダー枠組みへの対応のありかたが現れている可能性がある。 第1章では、調査方法と調査地の概要を提示し、ガーナ都市部のヘアドレッシング事情を説明した。近年のアクラでサロンの需要増大をもたらしたのは、1980年代以降の政治経済的変化を背景とした近代的ヘアドレッシング技術の普及であった。 第2章では、ヘアドレッシング隆盛の背景を歴史的・文化的側面から検討し、美容師業の展開過程を跡づけた。近代的ヘアドレッシングは、髪の手入れにかんするガーナの文化的背景に適合的なものであった。美容師業は、ヘアドレッシング技術の導入に対する女性たちの情熱に牽引される形で発達してきた。			

第3章では、サロンの種類や参入経路等を整理し、就業者の社会経済的特徴を明らかにした。サロンの需要増大という新たな経済機会に反応したのは、都市部にアクセスをもち、平均よりわずかに高い教育を受けた「新しい」層の若い女性たちであった。

第4章では、就業者の参入経緯や美容師業の特徴を分析し、美容師業を、現代ガーナ都市部の社会経済状況における、ジェンダーにもとづく役割期待への対応という面から検討した。美容師業は、ホワイトカラー志向と教育・雇用面の制約との間で滞留していた「行き場のない」女性たちが、資本・労働面の制約要因を克服して二重の役割期待をみたし、パートナーとの間に、協調的でありながら自立的という新しいジェンダー関係を築くことに資するものであった。

第5章では、第6章の背景ともなるサロン経営を取り巻く最近の状況について指摘した。美容師には一種の上昇志向が認められるが、その一方で近年のサロンは、競争の激化や厳しいビジネス環境のなかで、高級化と淘汰の時代を迎えつつある。

第6章では、サロン経営の維持・改善に向けた美容師の試行錯誤を、関連団体の動きとともに分析し、美容師の間における変化の兆しを指摘した。美容師業は、技術とファッションの両方にかかわる職種である。こうした特徴をもつ美容師業での生き残りを図る過程で、一部美容師の間には、「学校中退者の仕事」から一種の「専門職」への性格変化の萌芽がうまれていた。

終章では、以上をまとめ、経済活動の面からみた、アクラ女性によるジェンダー枠組みへの対応のありかたを、総合的に考察した。美容師業は、現代ガーナ都市部の女性が、制約要因を克服してジェンダーにもとづく役割期待をみたし、さらには、自立性を保ちつつもパートナーとの間に協調的関係を築くという、新しいジェンダー関係を追求することを可能とするものであった。加えて、一部の美容師にみられる「専門職」化の兆しは、彼女らが美容師業という、女性に割り振られた経済活動への従事をつうじて、支援者であると同時に一個の職業人でもある存在として、みずからを再定義しつつあることを示している。

近年のガーナ都市部における美容師業の展開は、女性が既存のジェンダー体制を前提に日々の営みを行うなかで、状況変化に応じてジェンダー関係を再編成し、さらにはジェンダー体制の根本にかかわるみずからの位置をもずらしていくという方向性を示すものであり、先にあげた行為遂行性の概念にもとづくアプローチの有効性を示唆するものといえる。ただし、サロン競争の激化が今後の美容師業にもたらしうる限界性や、上記の「ずらし」が資源に対するアクセスの不利や過重労働負担といった具体的なジェンダー不平等の改善にどの程度貢献しうるのかという点については、引き続き検証が求められる。

(論文審査の結果の要旨)

西アフリカ沿岸部の都市では、植民地時代から女性の経済活動が盛んで、とりわけガーナやナイジェリアの女性商人はマーケット・マミーと呼ばれて、1960年代には多くの研究がなされた。本研究は、そのような西アフリカ都市部における女性の経済活動研究に新たな1章を加えるものとなっている。

1990年代以降アフリカの都市部において、女性のストレート・パーマが急速に広がってきた。本研究の対象地域であるガーナの首都アクラにおいてもそれは顕著で、申請者の調査対象地域であるマディナ地区の約4平方キロメートルの土地で、サロン(美容室)の数は401店にもものぼったという。

申請者は最初に、アクラにおける近年のサロン急増の実態とその要因分析を行い、1980年代以降の政治経済的变化と、その中で起きた近代的ヘアドレッシング技術の導入の影響が大きかったことを述べている。髪を装うというガーナの文化を背景としているものの、この近代的ヘアドレッシングは、技術的には伝統的髪結いとは異質のものであった。美容師たちはこの新しい技術を積極的に吸収することで、新しいヘアドレッシングの需要に応え、サロンを急増させてきたということになる。

美容師たちの個人史に関わる詳細な調査の結果、ヘアドレッシングの拡大に最初に反応したのは、都市部に居住する若い女性たちで、平均よりわずかに高い教育を受けた「新しい」層の女性たちであった。彼女たちは、ホワイトカラー志向を持ちつつも、教育と雇用面の制約の中でそれが実現できなかった、いわば「行き場のない」女性たちであったという。しかし美容師業は、マーケット・マミーと比べ子育てや家事との両立が容易で、収入も悪くなく、夫との間で協調的でありながら自立性の高い関係を築くことができる新しい職業であることを明らかにした。

美容師業は、技術とファッションの両方にかかわる職種であり、「専門性」を持つ職業として立ち現れてきている。関連団体の組織化も進んでおり、美容師の中には常に新しい技術を導入し、サロンの改善を図るものも多い。そうでない者は退却を余儀なくされる状況にあり、この職業は、「学校中退者の仕事」から一種の「専門職」へと性格を変化させてきている側面も見せつつある。

このような分析結果をもとに申請者は、この職業がマーケット・マミー研究を中心に展開されてきた西アフリカのジェンダー関係研究に新しい課題を提起するものであるという視点から、美容師にまつわるジェンダー関係に関する検討を行っている。

西アフリカの女性を主たる対象として展開されてきたマーケット・マミー研究が明らかにしてきた女性商人の特徴は、経済的自立性、居住形態の分離性、さらには親族紐帯の継続などである。しかし、ジェンダー体制の中では、彼女たちは家計における経済的分担や家事・育児の担当という二重の役割が期待されていた。そんな中で、この美容師という職業は、既存のジェンダー関係で前提とされてきた女性の二重の役割を難なくこなし、その上で経済的にもより優位で専門性を高めた新しい女性の職業と

して認知されつつあると考えるのである。これはジェンダー関係を劇的に変化させるものではなく、行為遂行的にそれを編成代えるものであるとしている。

このように本論文は、1990年代以降西アフリカの都市部で急速に広まったヘアドレッシングの動きに着目して、それを支えるサロンの経営、さらにはそこで働く美容師や見習いなどの実態を詳細な調査結果から明らかにし、その上で、この新しい都市部女性の職業が、ジェンダー関係に与える影響にまで踏み込んで考察した意欲的な論文である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成22年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。